

# in Between Blues(イン・ビトウィーン・ブルース)

## 事業の特徴・ポイント

- ・ふるさとの空と海の青、徳島が誇る藍の文化をより多くの人たちに知ってもらいたい
- ・藍染×サーフカルチャー×カフェを融合した海辺の新しい情報発信拠点

## 事業概要

◎in Between Blues については、<https://inbetweenblues.jp/>

### 1. “Think globally,act locally”との出会い

代表の永原レキ氏は、今回紹介する海辺の藍染スタジオ&カフェ「in Between Blues」(以下「iBB」)がある日本有数のサーフィンスポットである海陽町生まれ。14歳でサーフィンを始め、大学在学中に全日本サーフィン選手権大会で個人・団体優勝を達成するほどの腕前。大学卒業後は、国内外で働きながら転々としていたが、メルボルンで、「Think globally,act locally」という標語との出会いを機に、自らも一所に根を張って生きることを決意。自分にとってのローカルを考えた時、思い浮かんだのは、海陽町の豊かな自然と美しい海だったという。帰国後、オーガニックをテーマとした展示会で藍染と出会う。環境に優しい天然染色文化に心打たれ、展示会へ出展していた衣料会社へそのまま入社。藍染に打ち込む中、ある時、ものづくりに挑む「匠」を応援する「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 2016」への出品の話が舞い込む。藍染の濃淡により、「空」と「海」を表現し、故郷に根づく遍路文化を築いた空海にも由来した名の「空海藍surfboard」を徳島県代表として製作、出品した。故郷が誇る文化や自然環境を一枚のサーフボードに込めたこの作品の出展が反響を呼び、2017年4月の「iBB」オープンへの後押しとなる。

### 2. 空海藍地元の美しい青を生み出す自然環境や伝統文化の産業化を目指して

「iBB」は、藍染×サーフカルチャー×カフェが融合した海辺のショップ。店名の由来は、空海が見た水平線の美しい青の風景だ。ショップでは、藍染のサーフボードをはじめ、衣料品、ペーパー用品類の販売と藍染体験、カフェの3事業を展開している。青の濃淡から織りなす藍染商品は、その美しさとともに抗菌・消臭・防虫などの薬効効果もセールスポイント。インターネットや地域内外のイベントでも展示販売を行う「iBB」の軸事業である。「iBB」オープンの後押しとなった藍染のサーフボードは、インテリアアートとしての役割も兼ね備えた逸品であり、製作にはかなりの時間と手間を要するため、通常のボードと比べるとかなりの高額商品。今後は、海外の富裕層向けの販路開拓と併せて、普段使いできる低価格の商品開発も検討しているという。奥にある工房では、大窓から見える空と海の青を感じながら、手ぬぐいやTシャツなどの藍染体験ができる。美しい海を眺めながら、自然由来で廃液が海を汚さない、自然に優しい藍染という伝統文化の体験を求めて、季節問わず国内外から多くの人々が「iBB」を訪れる。併設されたカフェスペースでは、無農薬栽培の藍の葉や種を使用したお茶やスイーツを提供しており、地元住人やビーチクリーン活動など地域イベントの参加者、観光客といった様々な人々が憩うコミュニティスポットとして機能している。

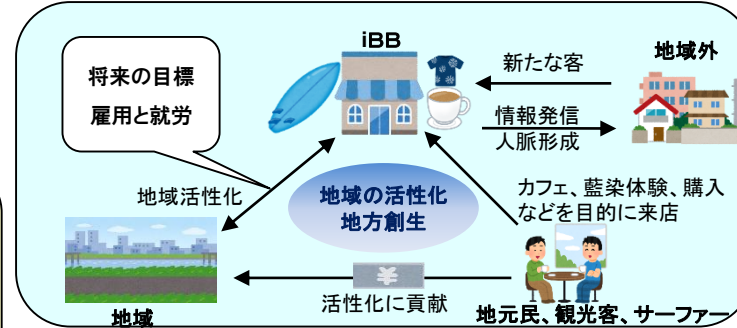
この3事業をうまく融合させることで、地元へ伝わってきた伝統的な藍文化と自然環境、サーフカルチャーの情報発信拠点として、地域の活性化に貢献していくことが狙い。過疎化・少子化など地元を取り巻く問題は深刻で、自身が通学していた高校も廃校になったという。地元が持つ魅力ある自然環境や伝統的な歴史文化など貴重な財産を内外へ発信することで、若者の都会への流出に歯止めがかかればと。地元中学校での総合学習における藍染体験、講演もその一つで、藍染という伝統工芸が持つ様々な可能性など、地元には将来の生活、仕事に活かせる貴重な財産が多くあることを知ってもらえる場の提供に力を注ぐ。若い世代の力で地域資源の産業化を実現させたい！将来的には、「iBB」で藍畑(農業部門)と縫製部門を構え、多くの雇用が生み出せる会社にするのが目標だ。

東京五輪・パラリンピックのエンブレムに藍色が採用され、サーフィンが正式種目となったことから、永原氏の活動の幅はますます広がることだろう。地域の活性化のため、声が掛かる様々なイベントには参加して、地元が持つ様々な魅力をアピールしていきたいとのこと。20世紀に産声をあげたサーフカルチャーと藍などの伝統文化の融合により、地方創生を試みる「iBB」の今後に期待し注目したい。



photo: DaisukeKobayashi

## 事業のポイントについて



## 今後の事業展開について

自然や伝統文化など色々な魅力がある海陽町。地元のファンになってもらうため、自然と癒しをテーマに、天然藍素材を取り入れたプライベートサロンを増設した。海と空と藍の美しい3つの青を感じながら行うマッサージは「iBB」でしか味わえないリラクゼーションであり、癒しを求める新たな顧客獲得を狙う。

藍とサーフィンから生まれた縁。色々なイベントへ参加したことで、多くの人と繋がりができた。東京五輪・パラリンピックのエンブレムに選出された野老朝雄氏もその一人。永原氏との縁もあり、野老氏はサーフィン日本代表「波乗りジャパン」の公式ウェアのデザインを監修。

自身の行動力とこうした人脈を活用し、ワークショップ、展示販売会等を開催。徳島県だけではなく、東京や大阪でも開催し、藍文化を全国へ発信。様々なイベントへ参加し、波及効果を狙ったマーケティング展開を行い、自社の藍染製品を国内外のセレクトショップで販売するため、日々邁進している。

## 産業経済研究員からの一言

海陽町はサーフィンや釣り、ダイビングなどを楽しむ人々にとって聖地ともいえる場所で、よそ者には居心地の良い空気感があるようだ。それは、南国特有の大きさによるものか、四国八十八ヶ所霊場を巡礼するお遍路さんを大切にもてなす「お接待」の文化に端を発するものなのかは分からない。ただ、外部に対して寛容で多様性を認め合う地域に、ユニークな人材が集まるのは確かである。

このような土地柄や、藍の歴史文化、豊かな自然、サーフィンの可能性に魅せられた永原氏は、単なる熱い思いではなく、ビジネスの手法で地域の価値を高めようとしている。人口減少と高齢化の波が押し寄せる地域を元気にするには、若者が住み続けられる環境整備が必須である。「iBB」は、若者に地元の格好良さを伝え、彼らの雇用の受け皿を創るためのイノベーションを起こそうとしている。